自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員もメンバーが変わっているのに、再度グループホームの理念について話し合いを行い、抽象化せず、分かり易いように検討した。「もの舎では、個人の出来る事を尊重し、その能力を日常生活に生かせるよう支援します。そして、自立した生活を営み、安心して暮らせる環境づくりに努めます。」	事業所は地域密着型サービスの意義をふまえ、利用者や家族等にも分かりやすい理念を掲げており、玄関等に掲示している。新人職員には入職時の研修で事業所理念について伝えている他、毎月の職員会議の中で意識付けを行う機会を持っている。職員は利用者の出来る事を尊重し、自立した生活を営み安心して暮らせる環境作りに努め、理念の実現に向けて取り組んでいる。	事業所理念は全職員が理解し、目指すサービスを提供する上での根本的な考え方である。職員に理念を意識付ける取組は行っているが、実践状況の確認や振り返りの機会が十分ではない状況にある。今後は、理念の実践状況について定期的に振り返り、理念が提供するサービスに反映しているかを確認する機会を持つことが望まれる。また、事業所理念を、利用者・家族等、地域の方へも広くアピールすることが望まれる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入し、地域とのつながりを回覧板のやり取りを通して把握している。日常的には、日々の散歩、外出、買物を行っている。今年度はコロナ禍の中で地域行事、事業所内行事は以前の規模より縮小した形で行うことが出来た。	事業所は町内会に加入し、回覧板のやり取りを通して地域の情報を把握し、事業所からは行事や日々の取組、利用者の様子等を掲載した「もの木・もの舎瓦版」を回覧し、情報発信を行っている。事業所の地域交流室では季節ごとにフェスタを開催し、地域の方と共にお菓子作りや調理、創作活動などを行っている。また、地域の行事や避難訓練、清掃活動などにも参加し、地域の一員として交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍の中で、行事を通しての地域貢献は少なくなかったが、可能な限り行うことが出来、地域の方と触れ合う機会も持つことが出来た。また事業所から外に出る機会を増やし、日々の取組みやご利用者の様子を発信する機会を日常的に継続して取組んでいる姿勢が、地域貢献につながる方法の一つとして実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	推進会議は、系列の2つの小規模多機能事業所の3事業所合同で開催している。日常生活の様子やイベント等を報告したり、事業所の取り組みや課題、サービス評価の取り組み等を報告し、質の向上のために話し合い、協力や助言、指導を頂いている。その他、困難事例についても報告し、委員の方からの意見を聞く機会にしている。委員—10名 事業所—5名	運営推進会議は、行政、包括支援センター、家族代表等と事業所の代表の参加により、2ヶ月毎に開催している。運営推進会議の中では事業所の運営状況や取り組み、利用者の状況や困難事例等を報告し、意見交換を行っている。話し合われた内容は「もの木・もの舎瓦版」に記載し、家族等に配布し報告を行っている。	運営推進会議は、事業所の運営や取組、課題について話し合い、外部からの意見が得られる貴重な意見交換の場である。構成委員に行政や関係機関からの参加はあるが、利用者からの参加は無く、家族代表は3年間変わっていないことから、参加者について再考することが望まれる。また、参加できない利用者・家族等に対して、事前に意見や要望等を集める工夫など、積極的な取組が望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	行政(刈羽村)の地域密着サービスの担当職員及び地域包括支援センター職員は、運営推進会議のメンバーとして参加している事や地域ケア会議等に参加して、意見交換、情報交換等で日頃から連携を図れる機会を作っている。また、行政等からの依頼事項に対しては、出来るだけ受け入れる姿勢で対応している。	行政の担当者と地域包括支援センター職員とは運営推進会議や地域ケア会議において情報交換を行い、協力関係を築くよう取り組んでいる。行政の担当者と日頃から連携しており、緊急入所の受入れ依頼に対しても事業所は可能な限り受け入れを行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止の理念や身体拘束をしないケアの取り組みは、全職員が共有している。目配りや寄り添った介護の取り組み、日中は玄関や隣接事業所の出入口はオープンにしている事や、利用者を束縛しないように取り組んでいる。また、ベットから布団対応等、リスクに対しては個々に対応している。今後職員の負担の軽減のため、福祉機器の導入を検討していきたい。	事業所では、日中は玄関や併設する事業所へ自由に出入りできるような環境を整え、職員が目配りや寄り添った介護により、利用者の安全を確保しつつ自由な暮らしを支援している。職員は毎月開催する職員会議の中で、身体拘束をしないケアや個別の対応について話し合い共有している。また、日々のケアや言葉掛けで気になることがあれば、ミーティングや申し送り時にその都度注意や指示を行っている。	現在センサーマットを使用している利用者は1名いるが、使用状況を記録するとともに詳細なアセスメントや必要性についての検証が十分ではない状況にある。今後は身体拘束をしないケアについて職員間で再認識し、リスクについて全職員と家族等を交えて話し合いを行い、身体拘束をしないケアについて更なる取組がなされることが望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(5-2)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内研修の中で、虐待について職員間で話し合っている。職員数が手薄にならないように小規模多機能事業所との協力体制を図り、一人の職員に負担がかからないように配慮している。	高齢者虐待防止に関して、事業所内研修の中で全職員が学ぶ機会を持ち、虐待が見過ごされることがないように職員間で話し合っている。また、管理者は職員の疲労やストレスに関して配慮して、併設する事業所との協力体制を図りながら一人の職員に掛かる負担を軽減し、虐待防止や不適切ケアの防止に努めている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者1名が成年後見制度を利用している。職員に対して、高齢者の権利擁護の内容について理解が不足しているため、学ぶ機会を計画していきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書及び重要事項説明書で、契約の際に理解して頂けるように説明している。法改正や契約内容の変更の際には、文書等で説明し理解して頂けるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族が気軽に訪問に来れたり、意見や要望が言いやすい事業所の雰囲気作りに努めている。推進会議での家族代表を選出し意見や要望等を聞いたりしている。家族に対しては、事業所に来て頂く機会を作ったり、定期的な連絡で意見や要望を聞く機会を増やすように取組んでいる。	利用者からの意見や要望は、日々の会話の中で聴き取るよう努めている。家族等からは、運営推進会議の中で家族代表から意見や要望等を聞いている他、家族等が面会に来所した際に、利用者の健康面や機能面、活動面などに関する意見や要望を積極的に聞くよう努め、職員間で共有・検討し運営に反映するよう取り組んでいる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	グループ事業所の管理者会議を毎月開催し、職員の意見や要望を聞く機会を持っている。出された意見等は積極的に取り入れて改善や向上の機会に繋げている。	管理者は、毎月開催する職員会議の中で職員から意見や要望、提案等を聞く機会を設けている。出された意見や要望は、毎月開催するグループ事業所の管理者会議にて集約・検討し、運営に反映させている。管理者は、日頃から職員が意見や要望を言いやすい雰囲気作りに努め、運営やサービス向上に繋げるよう取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	働きやすい職場環境づくりを目指している。新たに設けた手当として、パート職員を含め全職員に対して毎月感染症予防手当の支給を行っている。また、深夜勤手当の改正及び夜勤時間の変更も行い、働く環境の整備に務めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	新人研修の実施や、毎月1回の事業所内研修を実施している。又、資格取得支援を行い受講料の補助、勤務配慮等を行っている。今年度は、グループ事業所全体の研修は4度行っており、可能な限り出席をしてもらっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍のため、今年度は近隣のグループホーム連絡会や外部研修は実施していないが、zoomを用いての研修など参加するようにしている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の面接や希望に応じて、本人の事業所見学や体験利用をして頂いている。入所後は意図的な働きかけや積極的にコミュニケーションを取り、安心の確保と信頼関係を築くように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には必ず事業所を見学して頂いたり、面談では家族からの希望や要望、大変な点を聞いて、抱えている不安等を把握するように努めている。利用直後は必ず本人の状況をお伝えする事にして、信頼関係の構築に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所前の面接を重視して当面の目標や働きかけを全職員で確認し共有している。また、主治医や入所前のケアマネージャーやサービス事業者の方からの情報提供と助言を受けている。また、アセスメントをしっかりと、今までやってきたことを知り、できること・できないことを可能な限り本人の意向を取り入れるように取組んでいる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者と職員は共に暮らすパートナーとして、生活の場面で一緒に出来る事を行っている。また、ひもときシートを活用し、できることを可能な限り取組んでいる。具体的には、家事や食事、茶話会を一緒にしたりして、活動の場面や語らいの場面とメリハリを持って生活をするように取組んでいる。		
19	(7-2)	○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人がこれまで通りの生活を送るためにはご家族の協力が必要不可欠であることを伝え、事業所とご家族がそれぞれの役割を認識して、安心して生活が出来るように努めている。様子報告は定期的に行ったり広報誌を発行している、ご家族から事業所へ来て頂ける機会を増やすように取組んでいる。	事業所は、利用者が安心して暮らし続けるために家族等の協力が必要不可欠であることを伝えており、面会や生活用品を届けてもらうなど、共に本人を支えていく協力体制を築いている。本人と家族との絆を大切に、利用者の日々の暮らしの様子が分かる写真を掲載した広報誌を定期的に発信している。老々世帯が増えている状況の中、なるべく事業所に足を運んでもらうよう、地域交流活動への参加を家族等にも呼び掛けている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の要望や希望等は実現出来るようにしている。今までの習慣等、外出を通して実現できるように働きかけている。また、本人からの要望等は殆どないが、聴き取り等を通して出来るだけ本人の今までの馴染みの方や場との関係継続の支援をしていきたい。	利用者は、事業所が定期的開催している地域交流活動を通して、地域の方や馴染みの人と関わりを持ち関係を継続している。また、併設する小規模多機能事業所を利用する地域の方と交流する機会があり、職員は馴染みの人や関係が途切れないよう支援している、	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士、利用者と職員はももの舍で互いに支え、助け合って、共に生活するパートナーとしての視点を持って支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了後も、今までの信頼関係を大切にしながら相談があれば対応していくスタンスで取り組んでいる。一例:学生の卒論に協力した。亡くなられ契約が終了した家族に、学生の卒論の主旨を説明し家族からの聴き取りの協力依頼と聴き取り時には同席して協力した。-		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者一人一人には担当職員制で対応している。最低限、担当者はその方の思いや希望、意向を常に把握し、ケアプランに反映するようにし周知を図っている。また、意思疎通の難しい方も表情や行動、言葉から気持ちを汲み取りその方の代弁者となれるように努めている。	担当職員は、日々の関わりの中で利用者へ声を掛け、思いや暮らし方の意向、意見等に耳を傾け把握に努め、職員間で共有している。利用者の重度化等により意思疎通が困難な場合には行動や表情から汲み取る他、家族を交えて本人本位の暮らし方となるよう検討している。	
24	(9-2)	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時センター方式の一部を使用して把握するようにしている。入所後は、同居の家族だけでなく、面会に来られた親戚や近所の方とのコミュニケーションを通して必要な情報を教えて頂くように努めている。	併設する小規模多機能施設の利用者が事業所に入居となるケースが多く、入居前の生活歴や暮らし方、これまでのサービス利用の経過など必要な情報を小規模多機能施設から得て把握に努めている。また、家族や親戚が面会に来所した際には趣味や好きなことなどを聞き取り、状態把握シートに記載し、これまでの暮らしが継続できるよう支援に努めている。	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の関わりからご利用者の生活リズムやパターン、行動、出来る事や興味のある事等を総合的に把握する事に努めている。また、利用者の新しい発見、些細な変化等についても記録に残し、申し送りや職員研修で職員全員に共有出来るように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご利用者の思いや要望を踏まえ、ご利用者の視点に立った計画、担当職員の日々の気づき等が反映されるような計画作成に努めている。毎月の評価を行い、ケース会議で現状の確認と課題の把握に努め、必要時には見直すようにしている。	担当職員は、日頃の関わりの中で本人・家族の思いや意向、意見等に耳を傾け、計画作成者が介護計画書を作成している。アセスメントを含め、職員全員で意見を交わし、モニタリングとカンファレンスを行っている。業務日誌には利用者に関しての身体的変化や気づきを青色インクペンで記入している。重度化された利用者の意向の確認は難しく、家族からの要望等は少なくなっている。	介護計画は利用者の視点に立ち、その人らしく暮らし続けるために、必要な支援を具体的に盛り込んだ個別の介護計画が必要となる。「本人に聞いても無理」と決め付けず、家族や関係者をも巻き込み、日々の気づきの記録や工夫、アイデアを反映しながら取り組むことが大切となる。職員の視点から見た業務をこなすための介護計画ではなく、利用者主体の暮らしを反映した介護計画になることが望まれる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録、業務日誌等に利用者一人ひとりの日々の様子や状況を適切に記録し、毎月総括表を用いてモニタリングも行っており、職員間で情報の共有しながらケアに活かしている。その他、職員間での申し送り、話し合いで必要時にはサービスや対応の見直しにつなげている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご利用者や家族の思いや要望に対して可能な限り対応していくように取り組んでいる。しかし中には、本人と家族の意向が合わず難しいケースもある、家族へ状況を説明しながら、対応に取り組んでいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議を通して地域の方や地域包括支援センターとの協力を頂きながら利用出来る地域資源を把握している。日常より地域に出掛ける事や地域の方が参加できる地域行事を行い、地域の力を借りられるように取り組んでいる。(昨年の6月より、地域交流会を開催し、今まで3回実施した。)		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関及びかかりつけ医に対しての受診は家族と協力して行っている。近隣のかかりつけ医については、事業所への往診もあり、報告や相談、指導等、連携が取りやすい環境になっている。	協力医療機関及びかかりつけ医への受診は家族の付き添いを基本とし、家族と協力し合っている。近隣のかかりつけ医とは事業所への往診があり、報告や相談、指導等、連携が密に取りやすい環境になっている。歯科受診については定期的な往診があり、適切な医療を受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員の退職に伴い不在になったが、隣接する事業所の看護職員から必要時に連携し対応している。又、日常の利用者の状況は、隣接する事業所と合同で行っているミーティングで共有し、必要な看護ケアを協働で行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時にはご家族と一緒に付添い、情報提供を行っている。情報提供については、入院連携シートでの提供及び病棟等で行っている。入院中は状態等を適時に家族やケースワーカー等に確認している。なお、退院時は安心して元の生活に戻れるように病院からの退院指導を受けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時にご家族等に終末時をどのように迎えたいのか等の意向を確認したり、事業所の方針や出来る事等を説明している。入所後は、病状や状態の変化に応じて、家族に対して、主治医からの説明の場を設ける事や、事業所で看取りを行う場合には、再度、方針を説明し同意書を頂いている。	看取りに関する指針が整備され、看取り介護における同意書を契約時や病状・身体状況の変化に応じ、本人・家族等へ意向確認を行っている。また、主治医からの病状・身体状況の説明に対して、事業所のできることを説明し対応している。昨年度は1名の終末期から看取り対応を家族や主治医等と連携を図りながら取り組んでいる。看取りケアとして全職員の体験や経験した思いを聴き取ること、チームケアへ活かしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34	(12-2)	○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変や事故発生時の速やかな対応が出来るように緊急時のマニュアルを作成している。その他、事業所内研修で対応等の研修を実施している。	利用者の急変時や事故発生時に備え、迅速に対応できるようわかりやすいマニュアルを作成し、職員の見やすいところに設置してある。コロナウイルスやインフルエンザ予防の対応策が検討され、発生時は最小限に抑えられるよう職員周知をしている。AEDは小規模多機能事業所と共同使用ができる場所に設置され、職員間では理解できている。	すべての職員が、年1回の応急手当の実技勉強会を実施し、体験・習得をしたり、AEDの取り扱いも含め、確実に身に付けていける訓練を定期的に行うことは、職員の不安要素の払拭にも繋がる。実際の場面で活かせる技術を習得し、救急車が到着するまでの応急処置や準備することなどケースを想定し、話し合いながら勉強会を繰り返していくことが望まれる。
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を実施している。訓練は隣接事業所と合同で行い、深夜帯を想定して実施している。1/1の地震時は、少ない勤務職員の中で、適切な対応がとれ利用者、職員とも怪我は無かった。また、休みの職員も駆け付けてくれ、発生後の対応も適切に行うことが出来た。発生後、役場職員、地域の消防団の安否確認等の連携も早急に出来た。	併設事業所と合同で、年2回の避難訓練を行っている。昼夜問わず利用者を安全に避難できる方法を全職員で、適切に行動できるよう繰り返し行っている。1/1の地震発生時は、速やかに職員連絡や協力体制ができ、緊急対応策が取れ、利用者の怪我や体調急変者もなく無事に過ごすことができた。発生後の地域担当者や消防団との安否確認等の連絡や連携も協力体制が図れている。	いつまた起こるか分からない大雪・雪害に関しての想定や被害の話し合いを事業所だけでなく、運営推進会議や自治会等で幹線道路の雪害で配食サービスが届かない経験談を話し合い、今後へ向けての助言や工夫、準備等の取組が望まれる。また、職員連絡網・伝達内容訓練は、緊急連絡を速やかに行うための実践訓練として取り組まれるよう期待する。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの思いや考え、希望を尊重し、無理強いせず誇りやプライバシーを損ねない優しい声掛けや対応等、職員同士が話し合いながら日々のケアの中で発揮できるように努めている。	利用者・家族等の対応についての接遇・身だしなみ等のポイントをわかりやすくA4サイズにまとめ、見やすい場所に置いて活用している。利用者の言っていることはしっかりと最後まで聴き取り、急かせず否定はしないよう努めている。不適切ケアに関しては、その都度注意し、不適切な言葉掛けには、適切な言い替えの助言を具体的に提示している。利用者へのやさしい言葉かけと誉め言葉をプラスした対応に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者との会話や接する場面では、自己決定を意識して依頼型の声掛けや対応をするように心掛けている。意思表示の困難な方に対しては、表情や仕草から思いや希望を汲み取れるように努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な日課は決まっているが、本人の希望や気分によって柔軟に過ぎて頂いている。又、役割を持ってもらい、家事や作業等の協力もお願いしている。ケアプランにも盛り込み、職員へ意思統一できるよう勤めるが、特定の利用者になりがちなので注意している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	寝巻から日中着の着替えは必ず行っている。朝は髪を梳かしたりして身だしなみに気を配っている。訪問理美容を使って定期的に髪を切っている。パーマやカラーの希望も可能である。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の皮むきや下処理、盛り付けや用意も出来る場所は利用者から手伝って頂いている。職員は、必要な介助を行ったり会話をしながら食事支援をしている。また、行事献立や季節に応じた献立を計画し、食事から季節を感じられるような工夫を行っている。	野菜の下処理や盛り付け、茶碗拭き等、利用者のできることを引き出し、職員と世間話をしながら食事の準備や後片付けを一緒に行っている。また、お天気の良い日を見計らって、戸外へテーブルを出し季節を感じながら食事をすることもある。3名のミキサー食への利用者対応も行いながら、行事食では季節を味わい、ノンアルコールビールで「食」への喜びや楽しみを提供をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事支援を通して、利用者一人ひとりの好みや食事、水分量の確認や把握が分かり、職員間で共有している。食事量の少ない方への補食の提供、食事の形態や量、食器や補助具等、その人の状態に応じて提供している。-3食ともチルド食を利用しているが、週3回は、パートの職員が手作りの食事を提供している(夕食)-		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎朝起床時には、紅茶でのうがい・水分補給を徹底しており、口腔内の乾燥防止、食後の歯磨きやうがい、口腔ケアを必ず実施している。夜間は義歯を洗浄している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	現在2名の利用者はオムツを使用。他の方については、一人ひとりに応じた時間を見計らって声掛けや誘導を行っている。夜間帯のポータブルトイレの使用はあるが、安易なオムツ対応はせず、日中はトイレでの排泄を支援している。	一人一人の排泄パターンや声掛けでトイレ誘導を行っている。夜間のみポータブルトイレを使用する方が1名、オムツ対応の方が3名おり、時間を見計らって排泄支援を行っている。常時オムツ対応の方で直接的な排便の訴えはないが、仕草や落ち着きがなくなる様子を見て、ポータブルトイレへ移動し排便ができている方がいられる。利用者の排便周期をケース記録や業務日誌に記録し、職員間で共有し合い排泄支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄の見落とし、チェック表の記入漏れには十分に注意している。取組みとしては、生活が不活発にならないように体操や散歩、お手伝い等身体を動かす事や適切な水分補給の実施、食事のメニューの工夫や牛乳、ヨーグルトの提供等に取り組んでいる。状況によっては主治医へ相談し服薬等でも対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	臨機応変な入浴体制はとれない現状ではあるが、利用者は週3回入浴が出来る体制、ゆっくり入れる時間帯(午後浴)の設定、1日に2~3名の入浴人数等で心地良い入浴ができるように配慮している。入浴を拒否する方には無理強いをするのではなく時間を置いて声掛けや働きかけを行い、拒否なく入浴して頂くように働きかけている。	入浴は週2回、ゆっくりと入ることができる午後浴としている。菖蒲湯やゆず湯等や市販の入浴剤を利用し、匂いや手触りで季節を感じながら入浴が心地よい時間になるよう支援している。入浴を拒否する方には無理強いをせず、時間を置いての声掛けや気分が変わるような働きかけを心がけている。重度化した利用者は、併設する事業所の浴室を使用して対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	メリハリのある生活が送れるように日中は活動の機会を増やす事を目標にしているが、一人ひとりの生活ペースや状態を見て休息が必要な方には休んで頂く等配慮している。夜間の不穏時には話を聴いたりお茶を出したりして安心して休めるように働きかけている。また、状況によって主治医に相談し、内服薬等での対応をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全職員が薬の目的や内容、用法等を十分理解しているとは言えないが、誤薬等のミスが発生しないようにする事、血圧を下げる薬等、薬の用途は最低限理解するようにはしている。服薬時の確認、チェックの徹底を図り事故防止に努めている。身体状況の変化が見られた時は速やかに主治医に連絡するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者一人ひとりの生活歴や習慣などを把握した上で、普段の生活を共に送る事を目標に、家事等の出来る事を職員と一緒にを行うように支援している。現在、コロナの感染予防の為、掃除など分担し行ったりしている(手すり拭きなど)		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外に出る事、外気を感じる事を事業所の目標にしている。朝の体操は、天気が良い時は屋外で実施(4月~11月)したり、近隣の散歩、日光浴、プランターの水やり等、1日1回は外に出る機会を日課に入れている。特別な外出は、計画的に実施している。	年間行事として、お花見や出雲崎方面へのドライブ外出等、季節を感じての外食を楽しめるよう計画を立てて行っている。朝の体操時には屋外で行ってみたい、散歩や日光浴、プランターの水やり等、日課に取り入れ、外気に触れる機会を日常的に持てるよう事業所の目標として取り組んでいる。また、利用者のその日の気分で外出や買物へ出かけることもあり楽しみの提供に努めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、手元にお金を所持している利用者はいないが、希望があれば自己管理は可能。スーパー等人混みの多い場所への外出の機会が減っているが、今後買物時には、預かっているお金を渡し、その方の能力に応じて本人から支払って頂けるように取組んでいきたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人・家族の要望により携帯電話を所持している方もいる。また、電話を希望がする場合は、事前に家族の了解も得ながら、電話のやり取りをしている。手紙については特に支援の希望が見られていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	事業所の作りが木材をふんだんに使っているため全体に落ち着いた雰囲気になっている。それでももの舎を一つの家として捉え、玄関の花を一緒に飾ったり、季節感のある飾りを一緒に作成し、それを掲示したり等して居心地の良い環境づくりに取り組んでいる。	地元木材を利用した太い柱や梁を活かした木造建築は、落ち着きあるどっしりとした安定感と安心感を与えている。昔懐かしい暖炉があり、柔らかな炎で暮らす者たちを温かく包み込んでいる。暖炉の周りでは、利用者とともに季節の花を生けたり、もくもくと手作業に集中したり、昔遊びを賑やかに広げたり、季節の歌を唄ったりなど思い思いの時間を居心地の良い空間の中で過ごしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	地域交流室、リビング、中央ソファ、小規模との共有リビングの4か所を設け、活動に応じた利用やご利用者が思い思いに過ごせる場所を確保している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもので活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	最低限必要な環境、備品等は、事業所で準備している。(ベット、収納棚、洗面スペース等)その他、本人が必要な物品や使い慣れた物、思い入れのある物品の持ち込みは制限していない。中には、タンスやソファ、テレビ等を持ち込んでいる方や写真等掲示している方もいる。	居室の窓際には木製の造り付けベンチがあり、その日の気分で窓からの四季を愛でたり、気の合う方と楽しく過ごすことができる空間がある。ベッドや洗面台、収納棚が備品として設置されており、本人の使い慣れた筆筒や物品等を持ち込むことができる。今まで使用してきた思い出のある好みのソファや家具を置き、家族との写真や好みの絵などを飾り、その人らしく居心地よい居室作りをしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	事業所全体が安全に生活しやすいようにバリアフリーになっている。その他事故の防止のため、必要箇所の手すり、トイレでの転落防止のバーの設置や、安全を阻害する恐れのある物品の管理には注意している。		